

フィリップ・ロス『偉大なアメリカ小説』研究

尾木庸子

1

ヘブライ学校に通う13歳の少年の、ユダヤ社会に潜む矛盾に対する反逆を描いた「ユダヤ人の改宗」(“The Conversion of the Jews”, 1959)のラストシーンに描かれているのは、ユダヤへの回帰である。屋根の上の反逆者は彼の戦いが終わると、ユダヤ人ゲットーのイメージを持つ黄色い救命ネットに飛び降りる。

ここには、作者のフィリップ・ロス(Philip Roth, 1933-)の文学的姿勢がよく表われている。与えられたコミュニティの中で、そのコミュニティのモラルや権力や規範という厳然と存在する壁にぶつかってゆこうとする人間の行動を、ロスは常に描いてきた。彼は決してコミュニティに妥協しないが、かといってコミュニティの外で自由になろうとは考えていない。フォークナー(William Faulkner, 1898-1962)がジョー・クリスマス(Joe Christmas)を通して描き出した様に、人間は決して与えられたコミュニティの「円」から逃られない宿命にあるからだ。ロス自身、「書くことと様々な権力」(“Writing and the Powers to Be”, 1974)の中で次の様に言っている。

I have never really tried, through my work or directly in my life, to sever all that binds me to the world I came out of. I am probably right now as devoted to my origins ...¹⁾

ユダヤ人であることを普遍化することによってロスは結局、嫌悪や怒りや憂鬱だけでなく、「どうしようもない」という無力感をももたらす現

実社会の中で人間はどう行動するか、を描いてきたのである。彼はビートの様な現実拒否や、肯定的小説に見られる喜びに満ちた雰囲気には疑問を持っているようだ。

ロスはいままで一作毎に、「誰があるいは何が人の生活に影響と支配をもたらすか」(“Who or what shall have influence and jurisdiction over one’s life”²⁾)について考察し、「個人のアイデンティティや経験の境界をつくっている、自己抑制・倫理的信念・単純で大きな不安といった壁」

(“the barrier that forms one boundary of the individuals identity and experience: that barrier of personal inhibition, ethical conviction and plain monumental fear”³⁾)を段階的に取り払う試みをして、モデルやタブーの問題を掘り下げてきた。これらの作業の結果と、ロスが「神話解体の時代」(“the demythologizing decade”)と呼ぶ1960年代という時代の与えたインスピレーションから生まれたのが、第7作目の作品『偉大なアメリカ小説』(*The Great American Novel*, 1973)である。

複雑でグロテスクに歪み、とても現実とは思えない、混沌とした現代社会とよく似たコミュニティの中で、それぞれの主張を持つ人々の行動を描いている点で、この作品もこれまでの作品の延長上にあるとあってよい。ロスの描く世界に於いてはたとえ胡散臭い人物でも、ペロウ(Saul Bellow, 1915-)のタムキン(Tamkin)の様にそれはそれで一片の真理を含んでいるところが興味深い。

この小説は作中の筆者ワード・スミス(Word Smith, 略してスミッティ(Smithy))の作品、という設定になっている。元スポーツ記者のスミッティは現在87歳で、老人ホームに入れられている。彼がそこでしょうとしているのは、アメリカの野球界に戦前存在していた第3のリーグ、愛国リーグ(the Patriot League)が、共産主義活動を行なった疑いで国家権力によって歴史上の全ての記録から抹殺されたいきさつ、リーグ内のルパート・アンディーズ球団(Ruppert Mundys)にアメリカが何をしたか、を発ぐ真実の小説を書くことだ。年齢のため肉体は衰弱し、真実追求者の御多分に漏れず、世間からは精神的な圧迫を受けているのだ

が、彼は「たえず苦しんでいながら……本人はあまりまいっていないかった」 (“... *in perpetual pain* ... he's (=Smitty's) not cracked quite yet”⁴⁾)と言う。この、人間の最も基本的なエネルギー、不屈の精神を持って彼は「あらゆる言葉が真実への偽証であり裏切りである世界から、真実と真実の歴史を取り戻すための芸術」 (“an art that reclaims what is and was from those every word is a falsification and a betrayal of the truth”⁵⁾) の作品をつくろうとしている。

スミッティのフルネーム *wordsmith* は「言葉細工師」の意味を持ち、言葉を取り扱い、構築する者としての特別の役割が彼に与えられていることがわかる。スミッティの、頭韻・対照法・列挙・差別語・径語・猥褻語・禁句を駆使した斬新な手法や、コメディ創造のために存在するコメディという乾いた笑いの世界は、ロス自身の文学的手段による想像力の可能性拡大の試みなのである。

ロスはスミッティを通して、現実認識が難しく、人間（作家）の想像力が現実に対して敗北した現代の文学の危機的状況に於いてあくまでもフィクションの意義を認めて、その中で真実を鋭く見つけ、現実には負けない想像の世界を紡ぎ出す作家としてどう行動するか、という自己検証を行なっているのである。

2

「わが野球時代」 (“*My Baseball Years*”, 1973) という寄稿文には、ロス自身の熱狂的野球少年時代が楽しく描かれている。彼にとって野球とは、人種・階級・地域などを越えて人々をひとつに結びつけてくれる宗教色のない教会の様な存在であり、また、野球は強制や教化によって教え込まれるのとは異質な、もっと人間味のある優しい顔をした愛国心を、最良の形で彼の中に育ててくれたという。

ロスは、この、自由で人間的な真心、素朴で堅固な人間性の象徴として愛国リーグを設定したに違いないのである。スミッティの小説は、その愛国リーグが変質し破壊され、愛国どころか国家の汚点となっ

った過程を、驚くべきことに全編ブラック・ヒューモアで描き出したものである。

※ ※

第2次世界大戦下の1943年、ルパート・マンディーズのホームグラウンドは陸軍の乗船基地として政府に貸与されることになった。それは表向きはアメリカで叫ばれていた戦時スローガン「民主主義擁護のため」(“to help save the world for democracy”)という美名の下に行なわれたが、実は球団のオーナー、マンディー兄弟(Mundy=money)が私利私欲のために球場を賃貸したにすぎないのである。愛国リーグ全体が30年代の不況やスキャンダルで苦境にあり、徴兵によって選手の質が著しく落ちて人気低下していたので、休業の憂き目に会ったりする前に球場を金に変えてしまおう、とマンディー兄弟は考えた訳だ。

この美しい球場は、かつて選手の妙技が満員の観客を沸かせた夢の場所であった。特に、オーナーがマンディー兄弟の偉大な父グロリアス・マンディー(Glorious Mundy)だった時代には、ルーク・ゴファノン(Luke Gofannon)という英雄が活躍していた。野球を愛する気持があまりにも深かったので、給料なしでも野球を続けたことだろう、という彼は、野球技術も性格も雰囲気も全てが人気と尊敬の理由となった。彼こそ「マンディーズを代表した男」(“the fella who was Mundy’s”⁶⁾)であり、マンディーズの最も幸福な栄光の時代を象徴するスターだった。ところが父の死後球団を相続したマンディー兄弟が高額でルークを放出したことが原因で、ルークは転落の一途を辿り最後は事故死する。ここにマンディーズの蜜月時代は終わったのだった。

そして今回のホーム・グラウンドの賃貸しによって、あの懐かしい球場は武器と兵隊を送り出す場所と化そうとしており、間もなく軍隊色に塗り潰されてしまうのである。

この様な時代の推移の中で、金銭欲と国家権力の犠牲となって「ホーム」を喪失し、「ホーム」を求めながら国中の荒野(the wilderness)を彷徨するマンディーズの姿には、雑駁な文化の中で精神的指針を摸索し

ている現代人の姿が二重写しになっていると言ってよい。

球場を失いシーズン中の全試合を遠征で行なうことを余儀なくされたマンディーズは、戦時下の物資不足故に市の衛生課の廃棄物運搬車に載せられて街を出るのだが、皮肉なことに彼らは大リーグの野球選手の質としては、およそ廃棄物並みだったのである。無法者、14歳の少年、老人、片足のない男、片腕のない男、小人——といった寄せ集めのメンバーが表わしているのは、疲弊し荒廃した社会のグロテスクな病癖そのものに他ならないし、また、かつての栄光は見る陰もなく、リーグ史上最初の記録を次々と作ってゆくマンディーズに対する人々の失望感、ヴェトナム戦争で国史上初めての敗北を味わったアメリカの挫折感・虚脱感を反映している様に見える。

スミッティの小説はマンディーズとその遠征旅行期間中の細かいエピソードを通して、現代アメリカの政治的・文化的諸相——人種問題、文化の幼児化・女性化現象、政治言葉、プロパガンダ、マス＝コミ、コマースリズム、愛国心崇拜、極端な平等主義など——を断片的に、隈なく映し出しており、全体として、迷宮と化した現代社会の姿を浮かび上がらせる構成になっている。エピソードには実話も含まれているというが、どれが実話なのか見分けることが出来ない。また、フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) を思わすトラウム博士 (Dr. Traum (独語で夢の意)) 率いる精神病院の患者ティームが、マンディーズの分身の様に語られているのは象徴的だが、正気と狂気の境も曖昧である。ここでは、現実と虚構、正気と狂気を同列に並べることによって、現実の虚構性、狂気性を際立たせているのである。

この不可解な現実の迷宮から逃れることの難しさを、ロスには4人の人物——オークハート将軍 (General Oakheart), フェアスマス (Ulysses S. Fairsmith), アグニ (Roland Agni), ガメッシュ (Gil Gamesh) ——を通して描き出している。

※ ※

マンディー球場貸与に対して、愛国リーグ会長のオークハートは当初

から猛烈に反対を唱えていた。マンディーズのみが全試合を遠征で行なうことで、野球のフェアプレイの精神、即ち「野球規則」(“the Rules and the Rogulations”)が歪められること、しかも裏で糸を引いているのが愛国心のかげらもない下劣な金の亡者であることに我慢出来ないのだ。オークハート(勇者、剛の者)の名が示す通り、彼は第一次世界大戦の英雄、不正を憎む硬骨漢で、野球規則を何よりも尊重している。利己的で破廉恥な指導者ばかりの中で彼の清潔な個性に貴重に思われるが、一方でそれはタカ派的人物特有のものであることにも気付かされる。生涯を軍服で通したという彼が勲章で飾りたてた胸を突き出して、少年少女に野球規則の絶対的効力、その大切さを説く姿には、保守的で権威主義的な雰囲気漂っている。

野球規則とは野球を統制し、秩序を持たせる「法」なのであって、その権威を尊重し愛する将軍は、現実的な政治家である。苦境にあるリーグの、更には国家の、救済を期待されて会長に就任した彼だが、権威に対する忠誠心があまりに強いために融通が利かず、後にかえってリーグ破境者の破壊工作を後押ししてしまうことになる。

将軍と対照的な反応を示すのがマンディーズ球団監督のフェアスマスである。敬虔なキリスト教徒で球界随一の神士として通っている彼は、マンディーズの今回の災難を、主が「『試練と苦難を通して』」(“Through trail and tribulation”⁷⁾)「『彼らに目的と力を見つけ出させようとしている』」(“they shall find their purpose and their strength”⁸⁾)ことの表われと肯定的に解釈し、それを受け入れ、忍耐と精神力で乗り越えるようにと選手達に説く。

彼自身、正に忍耐の人であって、宣教師的情熱と喜びを持って野球伝導のために大変苦勞して世界を巡った経験がある。彼にとって野球は、どうやらキリスト教文化と同義語であり、この崇高な文化を黒や黄の肌をした野蠻人に伝えよう、という使命感に溢れていた。しかしそれは、糊のきいた白いシャツに絹の蝶ネクタイ、白いリネンの上着(his starched white shirt, silk bowtie, white linen suit)といういでたちの、青

い目をしたワスパ (WASP) としての一方的な使命感にすぎない。白人以外の民族の誇り (=文化) を一切無視しているからだ。アフリカのある村の長が、自分達は誇り高い部族だ、と言うのを聞いてフェアスマスは次の様に言っている。

“Pride he calls it? The men with spears? The women screaming like banshees? And from the looks of it, preparations underway for an outright act of cannibalism? That isnt pride in my book...”⁹⁾

オークハートがアメリカの法であるところの「野球規則」に固執する様に、彼はワスパ式の慣習・文化を意味する、野球規則外の「不文律」 (“unwritten law”) に固執し、それを絶対視している。ある黒人部族の男達はすべり込みが気に入って、フォアボールで一塁に歩く時もすべり込むのだが、フェアスマスはこういう形でワスパの慣習が破られ、野蛮人が白人の文化をアレンジしてひとり歩きを始めることが断じて許せない。そのことで誇り高い部族との間に対立が深まると彼は、野球が野蛮な儀式に変えられる位なら『むしろ野球の殉教者として死のう』 (“I would rather die a martyr to the rational pastime...”¹⁰⁾) と考える。

この様なアメリカ中華思想は彼が野球をエデンの園 (Eden) と見なししているところにいっそう明らかだが、この楽観的な姿勢が示しているのは現実に対する盲目である。アメリカ文化の絶対性を信じ、神ばかり見つめている彼には荒廃したリーグの中で彷徨うマンディーズ、そして現代社会、を現実の場で救ってやる事が出来ない。彼の唱える空論は、いみじくもマンディー兄弟が陰口をたたいた様に、「間もなくごみ捨て場行きになる過去の遺物」 (“a relic about ready for the junk heap”¹¹⁾) にすぎないのである。ワスパ文化に執着したまま、理想的ワスパ式の野球とは程遠い、無惨な試合を続けるマンディーズに、内心、深く失望しながら死んでゆく彼の姿は、白人中心時代の終焉と宗教の無力の時代を示しているのである。

さて、シーズンも終わる頃、マンディーズ唯一の大リーガーらしい選手で、リーグの首位打者でもあるアグニは、負け試合の連続にうんざりして、他球団への移籍を狙っている。ノリス (Frank Norris, 1870-1902) の野性児マクティーク (Mcteaigue) を彷彿とさせる、金色の波打つ髪、V字型の素晴らしい肉体、薄青い目を持ったこの 18 歳の青年は、マクティークが素朴な頃のアメリカそのものの象徴だった様に、また、インド神話の聖なる火神アグニの名が付けられていることからわかる様に、子供っぽい自惚れをも含めて、病いに冒された球界唯一のイノセントである。

彼は自分の自然児としての本能、即ち野球への深い愛情と、ロマンチストのタカ婦人トラスト (Mrs. Trust) 及び科学による野球管理を目論む数学の天才少年エリス (Issac Ellis) との板挟みになって苦悩する。彼の移籍は、愛国リーグ破壊の機会を狙うロシアの芝産主義者達が最も弱いマンディーズから潰すのに恰好の足がかりとなり、国を売るのに等しい行為だから国のためには本能を捨てるようにと夫人は説き、一方でグリーンバックス球団 (Greenbacks) オーナーの息子エリスは、自分の考案した科学食品ホイティーズ (Wheaties) をマンディーズのメンバーに食べさせ、残り試合を全勝させるのを条件に彼を引き抜こう、と誘うからだ。彼は一度はエリスに応じ、マンディーズは奇跡の勝利を収めることになるが、国家に対する裏切り行為、科学の力による作られた勝利への罪悪感に責め苛まれるのだった。

ところで、共産主義者の陰謀をトラストに吹き込んだのはギル・ガメッシュという 30 年代の天才プレイヤーである。バビロニア 2 世という超少数派民族の彼は自由と平等を謳っている筈のアメリカで、子供の頃から差別と迫害を受けて育った。そこから生まれたアメリカという国に対する烈しい怒り、嫌悪、憎悪の念が、彼の超人的プレイ、人を人とも思わぬ高慢な態度、全て権威と名の付くものに対する徹底的な反発といったあらゆる行動の原動力となった。事件を起こして球界を追放された彼は国中を放浪した後、アメリカに対する憎悪をつのらせてソヴィエトに

渡り、潜入、破壊、遺恨、テロを教える組織で教育を受け、アメリカ人を結束させている基盤である野球、野球と深く関わっている政治・文化・資本主義を根底から破壊するという任務をおびて、再びアメリカに戻ってきたのだった。

彼の本当の意図は、共産主義者のリーグ潜入という疑惑を捏造して球界を猜疑心と混乱に陥れ、内部分裂させようというものなのだが、野球のあるアメリカが忘れられずに心を入れかえ、祖国を救うために陰謀を曝露しにきた、と言葉巧みに実力者のトラストとオークハートにとり入る。それを球界最タカ派の2人が見抜けなかったばかりか、逆に、野球と愛国と国の危機を語るガメッシュのメロドラマ調の口車にのせられて、率先して猜疑心と混乱を煽ることになったのは強烈なアイロニーである。野球（＝アメリカ）を破壊するのは無神論で唯物論の共産主義者達などではなく、無神論で唯物論の資本主義者達（the atheistical materialistic capitalists²³⁾）自身なのである。

ギル・ガメッシュの名は古代バビロニアの伝説上の英雄から取ったものである。半神半人のウルク王ギルガメッシュは神の力で数々の手柄をたてながら、神の不死だけは手に入れられずに人として死ぬ。神の力・美しい容貌と凡夫の情欲・欠点を同時に持ち合わせた彼は、政治的に混乱していた時代に活躍し内乱を治めはしたが、それは戦いの疲労だけを残し新しい敵の侵入を招いた空しい勝利だった。名前以外にもこのウルクの英雄と多くの一致点を持つガメッシュもまた、現代の混乱に対して空しい結果しか残し得なかった。

マンディーズ新監督として迎えられた彼は、選手達に「憎しみと恨み」(“Hatred and Loathing”)の講義を行ない、支配者・管理者・差別者・俗物その他アメリカ社会に潜むあらゆる矛盾を鋭い言葉で発き、それを忍耐や運命論で黙って受け入れることなしに、憎み、怒って破壊せよと教える。彼の言葉は、保守的で矛盾をはらんだ権力への挑戦であり、その勢力に組織化されてしまっていることすら忘れて「不感の構造体」を覚醒させるものである。彼の指導によりマンディーズは、かつての彼

の様に怒りと憎悪をエネルギーに変え、見る見るうちに強くなってゆく。けれどもその勝利は、本来ある筈の喜びや楽しさとは無縁のものなのである。確かに、黒人作家のポールドウィン（James Baldwin, 1924-）も言っている様に、不当に軽侮された者の怒りは歴史を動かす原動力のひとつだが、怒りや憎悪だけではそのエネルギーは（正にガメッシュが望んだ様に）破壊にしか作用せず、破壊の向こうに「もうひとつの国」（“Another Country”）を建設することは出来ないのである。

そのことを敏感な本能で嗅ぎとったのがアグニである。彼は悩んだ挙句にエリスの科学的野球を拒否して、結局マンディーズに残ったのだが、今度はガメッシュによって変貌してしまったマンディーズに疑問を覚える。ルークやマクティグが黙ったまま現実の波に押し流されていったのとは対照的に、アグニは与えられた状況に対して抵抗を試みる。ガメッシュに直談判したり、彼にとって最大級の抵抗として、野球を捨てようかとまで考える。そんなある日、ガメッシュがソヴィエトのスパイと連絡を取り合っているのを目撃した彼は、そのことをガメッシュに問い質しているところを、別の事件のとぼっちりで呆気なく誤射されてしまう。

アグニの死は、純粋な情熱や善良な精神だけでは、いまや何ものも救い得ないという厳しい現実を表わしているのである。

こうするうちにもガメッシュは、出鱈目の報告書やスパイ・リスト、民心を煽動する巧みな話術で着実に破壊工作を遂行してゆく。サッコ＝バンゼッティ事件やローゼンバーグ事件の例を引くまでもなく、政治ヒステリーの中では、この現代社会でも中世の魔女裁判さながらに、たとえそれが虚偽のものでも疑惑はそのまま抹殺につながる。オークハートとトラストに加えて国の非米活動委員会は、調査中に一度でも名前が出た者を全て追放してしまう。こうして国中を巻き込んだ混乱の中で、愛国リーグは野球活動が不可能となり解散させられる。そればかりか意図的に国の歴史から抹殺されてしまうのだ。

祖国に疑心暗鬼と混乱と破壊の爪跡を首尾よく残したガメッシュは密

かにソヴィエトに戻るが、数年後、二重スパイの疑いでモスクワで処刑される。

自由と平等の国アメリカへの憧れの裏返し、とも言える憎悪と怒りで生涯を過ごし、自らを「神」(“immortal”)と呼んだ男の空しい死だった。

3

こうして、全てが終わった。

スミッティは狂気と無知と裏切りと憎悪と嘘の世界をただありのままに、滅茶苦茶な混沌の形のままに提示した。この作品に対する批判はこの点に集中しており、欠点としてその冗漫さ、下品さ、軽薄さ、低俗さ——といった点がしばしば挙げられている。けれども丹念に読み進めば、冗漫で下品で軽薄で低俗なのはロスの文学ではなく、スミッティの描き出した現実であることに気付くのである。これはあくまでも、スミッティの小説なのだ。

I don't claim to know what America is “really like.” *Not* knowing, or no longer knowing for sure, is just what perplexes many of the people who live and work here and consider this country home. That ... is why I invented that paranoid fantasist Word Smith ... to be (purportedly) the author of *The Great American Novel*. What he describes is what America is really like to one like *him*.¹³⁾

現実とは依然として手に負えない程複雑なので、スミッティを作中の作者にすることで訳の解らぬままに「解答」を出すことを避けたかった、という意味のロスのこの言葉や、小説中に描かれた様々な形の死からわかる様に、スミッティの小説には行き場を失った現代社会に関して何の解決の糸口も示されていない。

しかしながらこの小説にはほんの少しの続きがあった。愛国リーグの崩壊から唯一人ワード・スミスが生き残ったのである。この膨大な、真

実の小説をどうにか書き上げた彼は作品の出版元とスポンサーを捜しているが、国中の出版者、有力者、文化人、政治家に悉く断わられた。アメリカの恥部を曝露した小説を信じたがらないばかりか、拒絶する状況が続く限り、事態は好転しない。国内では無理だからといって、この内容ではソヴィエトで出版して貰える可能性もない。そこで彼は中国の毛沢東主席（chairman Mao Tse-tung）に請願の手紙を出したところだ。中国からはまだ返事は来ていない。

中国から来るかも知れない承諾の手紙は、混乱と絶望の社会に与えられる啓示の象徴である。ロスはその程楽天主家ではないから、恐らく返事は来ないであろう。そして、スミッティにもそれはわかっている。何故なら彼は中国のことを「旅人がけっして帰ってこない、あの未踏の地」（“that undiscovered country from which no traveler returns”¹⁴⁾）と呼んでいるからだ。

それでも、スミッティは待ち時間もなく、じっと待つ性格の男でもない（a man without the time for waiting, or the temperament¹⁵⁾）にもかかわらず、「私は待とう。待って待って、あくまでも待つつもりだ」（“I will wait. I will wait, and I will wait, and I will wait.”¹⁶⁾）と言う。魂の救済が当てに出来ない状況下で全力を尽くして戦いながらそのことを認識し、なおかつ彼のように「待つ」ことは決して空しい行為ではなく、むしろその単純で揺ぎない人間性こそが貴重なのである。そしてそのことを、真理を獲得して再生したユージーン・ヘンダーソン（Eugene Henderson）がそこに見出した歓びや幸福や安らぎ、とは無縁の世界の中に描き出しているフィリップ・ロスのユニークな視点を感じるのである。

Notes

- 1) Philip Roth, *Reading Myself and Others*, (Farrar, Straus and Giroux, 1975) p.9.

- 2) *Ibid.*, p.84.
- 3) *Ibid.*, p.85.
- 4) Philip Roth, *The Great American Novel* (Holt, Rinehart and Winston, 1973) p.3.
- 5) *Ibid.*, p.381.
- 6) *Ibid.*, p.83.
- 7) *Ibid.*, p.91.
- 8) *Ibid.*, p.91.
- 9) *Ibid.*, p.297.
- 10) *Ibid.*, p.298.
- 11) *Ibid.*, p.85.
- 12) *Ibid.*, p.335.
- 13) Roth, *Reading Myself and Others*, p.90.
- 14) *Ibid.*, p.379.
- 15) *Ibid.*, p.380.
- 16) *Ibid.*, p.380.